

江戶城總攻め (十七卷)

帝キネ 時代映畫

原作者 眞山青果  
脚色者 武内頼彬  
監督者 志波西果  
撮影者 立花幹也  
主演者 松本泰輔  
片岡童十郎  
草間實  
歌川るり子  
第三十六五號

紹介  
新興帝キネの第一回超特作品、その量に於いても、その質に於いても正にその超特作品一の名に恥じざる大作である。  
原作を眞山青果の同名の舞臺劇から採つたことは、稗史講談に材を求めて来た他社の所謂超特作に比して遙かに有利であり、鮮新であり、漸くその題材に於いて行詰らんとしてゐる時代劇大作に新しい生面を開拓したと云へやう。  
だが、武内頼彬の脚色は餘りに平坦であつた。原作にどの程度まで忠實したかは、原作を知らぬ評者には判らぬが、少くとも映畫として、十七巻の長篇には今少し映畫的な變化と轉換とを盛る必要がなかつたかと思ふ。組立も正攻法を一步も出でゐない。危げないといへばそれまでであるが、更らに今一步の飛躍性を望むも亦無理ではあるまい。御用益満ちお辰さの戀愛事件も挿入の域を出でず説明不足の難を免れない。その他ラストへの漸層的高潮も稍必然性と緊張を缺いてゐた。  
志波西果の監督手法は、彼の特異性によつて全部發揮してゐる。従つて多くの長所も多くの短所をも全篇に暴露してゐる。その演出及俳優指導に於いては勝安房を以つて最とする。勝の登場シーンに於いては優れ、シーンになつてゐた。尤もこれは勝に扮した松本泰輔の良きパーソナリ

テイにも負ふ所大であるが……。琵琶を弾じて新選組の没落を嘆く感傷性、生簀として置いた益光が、勝を斬らんとする時の心情、英公使パークスとの交渉時の描寫、等は、この監督の長所の發露であるが、富七裾野のキヤロップは聊さきか長きに過ぎ、且つ、そこには親客への訴へる力が極めて薄く、江戸市民百五萬の生靈危機を背にして馳けるには、餘りにも單一無味である。故意に斜にしたキヤメラとネガタイプを使用しての表現も悪くはないが、そのスピードが平調であるために迫力が薄く、大詰、西郷を説く山岡の熱も、餘り舞臺劇的で反つて効果を薄めた。映畫的キメラ・アイを以つて、観客に迫つて諺々説くべきではなかつたか、ラストだけにこの憾みが深い。總じて、この映畫前半の良さを取る。前半に於いて志波西果の長所に充分見出されてゐた。  
俳優では前記の松本泰輔の勝安房守を第一に、草間實の益満、明石緑郎の二役新門辰五郎及山岡鐵太郎であるが、山岡の時は少し一臭味があつた。片岡童十郎の西郷隆盛可もなく不可もなし。その他若葉馨の徳川慶喜が印象に残つた。セプトの豪大は日活の特作品に匹敵した。立花幹也のキメラはそのバンクロ使用の場の美しさ鮮やかさを推賞する。  
含まれ「江戶城總攻め」全十七巻の雄大篇、殊に内容に、戀愛物語や、喜劇的事件の挿入を許さず、武骨と豪氣一筋張りて押し通してまゝめ上げた志波西果の不思議な力に感嘆をすることには出来た。  
（訂正、第三十六五號紹介役割中、西郷隆盛——嵐瑠璃とあるは片岡童十郎、新門辰五郎——片岡童十郎は明石緑郎と誤り變更する。）  
興行價値——「江戶城總攻め」さいふ題名が魅力を持つてゐる上に、維新知名の志士が續々登場して江戶城明渡しまでの経緯を語る面白さ。況して新興帝キネの超特作、先づ特作品として充分客が呼べる。（五月十七日 淺草常盤座）